

『白蛇傳』の解讀補遺（二）

鈴木 陽 一

提要

这篇论文的主要内容如下。

第一，《白娘子永镇雷峰塔》开头的南宋林升的诗，是不是警世通言的编者冯梦龙选择的？参看《古今小说》第二十二卷《木棉庵郑虎臣报冤》引用张志远的诗，最后的两句「莫向中原夸绝景 西湖遗恨是西施」跟林升的诗的第四句「直把杭州作汴州」内容一致。而且张志远是冯梦龙同一个时代的人。因此，我认为林升的诗和张志远的诗都是冯梦龙引用的。在东北成立了「后金」王朝的情况下，冯梦龙要警告而让读者想出南宋时代国家灭亡的悲剧。

第二，《白娘子永镇雷峰塔》引用苏州和镇江的地名，同时让许宣使用名牌雨伞和扇子。这些细节在情节上有重要的效果。这些细节和白娘子的有魅力的形象给《白娘子永镇雷峰塔》这篇水神故事增加了城市的恋爱小说的因素。

『白蛇傳』の解説補遺 (2)

鈴 木 陽 一

本稿は前稿「『白蛇傳』の解説補遺 (1)」に続き、『白娘子永鎮雷峰塔』（『警世通言』巻二十八所収。なお前稿と同様に『白蛇傳』と略称を用いる。）の細部について、解説を試みることにした。

1 『白蛇傳』と同時代への政治的メッセージ

前稿で、『白蛇傳』冒頭の詩「山外青山樓外樓、西湖歌舞幾時休 暖風熏得遊人醉、直把杭州作汴州」について検討を行った。その要点をまとめておく。

一句目から二句目は杭州の風景の美しさと都市の繁華を描写し、三句目で春を楽しむ人々の様子を述べ、清明節の墓参の帰路に男女が出会うというこの物語の発端を語るための入話としてまことに相応しい詩と言ってよい。しかし、四句目は全く趣が異なり、おそらくは世に受け入れられることのなかった南宋の林升という文人が、西湖の美しさにうつつを抜かして、失われた領土を取り戻そうともしない南宋王朝の支配者や杭州の士民への憤懣を自らの不遇に重ね合わせて述べたものと考えられ、物語のモチーフとのつながりは極めて乏しい。

前項で述べたように、『警世通言』が出版されるのと前後して、中国の東北地域に満洲族を中心とする勢力が強大化し、瀋陽において「後金」王朝の設立が宣言され、明と「後金」の間で戦いが始まっていた。中国に再び宋代に起きた国家の分断という状態が再現するかもしれないという状況が生じた。そうした時代背景のもと、この詩を『白蛇傳』の冒頭においたのは馮夢龍か否か、また馮夢龍がおいたのか、もともとここにおかれていたものを編者たる馮夢龍が残したかはさておいて、ここに置かれたのは何らかの意図があったのか、あったとすればそれはどのようなものであったかということを前稿で検討した。

前稿を書いた時点では、この詩を『白蛇傳』の冒頭に置いたのが馮夢龍であるか否かを考える材料を筆者の不明により発見できていなかったため、極めて曖昧な解答となった。すなわち、この詩をここに置いたのが馮夢龍であるか否か、またここに置いた編著者の意図に関わりなく、この詩を読んだ読者は、明末の状況と国家が分断された南宋の状況とを重ね合わせる可能性が高いことを指摘するにとどまったのである。しかし、その後、この自らの問いへの解答を補強する材料を発見することができたので、ここで再度の補遺をすることとした。

解答のヒントは極めて身近にあった。馮夢龍の編纂になる『古今小説』（後に『喻世名言』と改題されて再度刊行された。）巻二十二所収の『木棉庵鄭虎臣報冤』（以下『木棉庵』と略称する）の冒頭の詩がそれである。詩そのものの解釈はしばし後に回し、まずはこの短篇の物語内容を紹介しておく。

この物語の主人公は南宋末期の宰相賈似道である。彼の父賈渉は地方官に過ぎず、また賈似道自身も妾腹のうえ、母は正妻から忌避され追い出され売り飛ばされてしまう。そのことを苦にした父賈渉も早世し、優秀であった賈似道は身を持ち崩し、杭州で野だいこ同然の暮らしをしていた。

その後、腹違いの姉が宮中に入り、皇帝の眼鏡に適い貴妃となったため、その手蔓でトントン拍子の出世を遂げ、やがて大権を握るに至る。折しもモンゴルが中原に向かって進撃を始め、南宋は滅亡の危機に直面するが、この時賈似道の選んだ道は秦檜の時と同様に懷柔と和平であった。しかし、それも長続きせず、彼自身が戦争の前線に立たざるを得なくなり、戦は大敗に終わった。朝廷内の風向きは一変し、賈似道はかろうじて死罪を免れ、広東の循州（現広東省竜川）の地方官として左遷、実質的には僻地への流罪ということになった。賈似道を循州まで送り届ける役目を担ったのが鄭虎臣という地方官であった。彼の父は太学生、折に、賈似道によって罪人として流罪となり死に追いやられたため、鄭虎臣にとって賈似道は仇であり、宮廷もこれを承知で鄭虎臣に護送の役目を与えたので、賈似道にとっては実質上死刑を宣告されたも同然であった。道中福建漳州に至って、賈似道は自らの運命を悟り、服毒自殺を遂げる。

この物語の冒頭に置かれた詩は以下のようなものである。

荷花桂子不勝悲、江介年華憶昔時

荷花桂子悲しみにたえず、江辺の年華に昔時を憶う

天目山來孤鳳歇、海門潮去六龍移

天目の山より来たりて孤鳳歇（つ）き、海門の潮去りて六龍移る

賈充誤世終無策、庾信哀時尚有詞

賈充世を誤りて終に策なく、庾信時を哀しんで尚詞あり

莫向中原誇絶景、西湖遺恨是西施

中原に向かいて絶景を誇るなかれ 西湖の遺恨は是西施

この詩の意味するところについては、この物語の語り手が丁寧読者（＝聞き手¹⁾）に説明しているので、その部分を引用する。

この詩は張志遠の創ったものでございます。宋朝が南渡して以後、

紹興、淳熙年間になってとりあえず金との戦争が収まりました。そこで君臣共にもはや太平の世だと称して、欲しいままに快楽に耽り、士大夫も湖山を賞翫するばかりで、中原を回復しようとする志はございませんでした。ですから、この詩の最後の部分で「中原に向かい絶景を誇るなかれ 西湖の遺恨は是西施」と言っているのございます。その頃の西湖には秋になると金木犀が咲き、夏には蓮の花の香りが立ちこめ、青山が湖を取り囲み、湖水は周囲の翠を映し、美しい建物が建ち並び、美しさは言葉で言い尽くすことができないほどでした。まさに蘇東坡先生の詩にある「若把西湖比西子、淡妝濃抹兩相宜」（訳者注：西湖はあたかも名代の美女西施のようなもので、薄化粧でも濃い化粧でも実に素晴らしい）という句の通りでございます。このため、南宋の君臣は山水の美しさに耽溺し、社稷の憂いなど忘れてしまいました。それは呉と越の戦いの際に、呉王が西施に惑わされたのと全く同じでございます。（中略）

さて、今日宋朝が南渡して以後²⁾、確かに夷狄³⁾の力は猖獗を究めてはおりますが、中原の人々は趙氏を（趙匡胤によって建てられた宋朝を指す）忘れてはおらず、機に乗じて領土を回復すべしと考えております。しかしながら、皇帝が奸臣の言うことばかり聴き、遊びほうけ、怠惰な日々を送っていたがためにとうとう国が減ってしまった（訳者注：詩の三句目、四句目がそれにあたる）のでございます。（『木棉庵鄭虎臣報冤⁴⁾』）

まず、この語り手による語りの下線部を注目されたい。ここで述べていることはこの文の冒頭、すなわち『白蛇傳』の冒頭に引かれた林升の「山外山、樓外樓」とほぼ一致している。また、この部分全体、すなわち『木棉庵』に引かれた詩も、西湖の美しさに魅せられたがために眼前の危機を

無視して後楽に耽っている人々を批判したものと解釈しており、林升の詩のモチーフと一致しているのである。

さて、もとに戻って、張志遠の詩であるが、張志遠自身については直接調べる手がかりが見つからないが、彼の著作『竹嶼吟稿』が『千頃堂書目』に記載されており、出版の時期は天啓年間、張志遠については字が叔明、嘉興の人という記載がある。黃虞稷の『千頃堂書目』については『四庫全書』に収められており、かつその提要で、『明史』の経籍志をまとめる上で貴重な資料となったことが記されており、書目として正確な記録が為されていると認められていた。また、同目録の著者が明末～清代にかけて生きた人物であるだけに、張志遠の『竹嶼吟稿』が刊行された時期が天啓年間であり、彼が活躍した時代が萬曆から天啓にかけてであったことはほぼ間違いないと思われる。

注釈のところで指摘したように、この冒頭の語りの中で、南宋の時代のことを語るのに「今日」という言葉が使われていることから、何らかの古いテキストが予め存在していた可能性は否定できないが、少なくとも冒頭の詩は、編纂者である馮夢龍が同時代の詩を引用してきたものであることから、詩とそれに対する解釈には、馮夢龍の意図が明白に示されていると考えることができる。

『木棉庵』の物語が基づく賈似道に関する史実は『宋史』をはじめ多くの史書、野史、筆記に記載されており、古くから物語として語られていた可能性はあると思う。しかし、張志遠の詩とそれに対する語り手、——馮夢龍の志向を反映していると思われる——の解釈を冒頭において『古今小説』に収められた時、この作品は明末の人々に向けてのメッセージとして読まれるものになったことが重要であり、作品全体の解釈もそこから出発すべきである。もともと『木棉庵』の物語内容が、異民族の侵攻に対して懷柔策を採ろうとする勢力への痛烈な批判を主とするものであり、そこに

前稿で述べた明末の社会状況を考えると、この冒頭の詩と解釈、そして物語内容のメッセージはかなりの切迫感をもったものであったというのが筆者の主張である。

ここで『白蛇傳』に戻って考えてみる。林升の詩の四句の中で、始めの三句は始めにも述べたように許宣と白娘子との出会いを予感させるもので、国家の危機といったことはおよそ関係がない。また、『白蛇傳』全体も、男女の恋愛を描きながら、水の神の物語と杭州の文化を語っていくものであって、ここでも直接南宋の分断国家ということは直接視野には入る余地はない。従って、林升の第四句「直把杭州作汴州」が意味を有するのは、杭州についての過去の記憶、特に南宋の分断国家時代とモンゴルに支配されていた時代の記憶があつてのことであり、かつ「三言」が世に出た時の社会状況、なかでも後金との戦いが始まっていた北辺の危機について関心を有していた人々にとってのみ有効であつたかと思われる。

杭州と西湖の美しさ、とりわけ清明節の頃の華やかな春の素晴らしさを描き、かつ『白蛇傳』の冒頭に相応しい詩ということであれば、白樂天、蘇東坡など多くの作品が選択可能であつた。にもかかわらず、敢えて第四句目に分断国家への怒りを詠み込んだ林升の詩が選ばれたことは、『白蛇傳』にも『木棉庵』の冒頭の詩の選択とこれに関する語り手の解釈とつながるものがあると私は思う。繰り返しになるが、物語内容そのものの違いのために、そのメッセージの強度には大きな差があると言わねばならない。しかし、林升の詩と南宋という分断国家、そしてモンゴルによる統治という記憶と、明末の北辺の危機とが、一つのメッセージとして読者に届けられていることは確かである。同時に『木棉庵』の詩と語りから、『白蛇傳』のメッセージは偶然に成立したものではなく、馮夢龍による意図されたものであったと私は考える。

2 細部の解説

2-1 「モノ」の活用

蘇州に流された許宣は、再び白娘子と再会する。許宣は白娘子のおかげでひどい目に遭ったと責めるが、結局はうまく言いくるめられてしまう。やがて四月八日灌仏会の日、僧侶たちが布施を求め、「柏亭浴佛」を担いで市内を歩き回ったという記述がある。これに対して、許宣は「杭州と同じですね。」という台詞があり。寺院に参詣に来た人々が仏陀の像に香水をかけるという風習と、ちょうど神輿のように仏陀の像を担ぎ出してお布施を乞うという風習があったらしいことが分かる。但し、ここで「柏亭」とあるのは「花（＝華）亭」の誤りと思われる。灌仏会の際には、仏陀の像を安置した亭には花を飾るのが古来寄りの風習だからである。

この灌仏会に興味を持った許宣は、白娘子の用意した衣服と装飾品を身につけ、精一杯のオシャレをして出かけていった。この部分は、原文と訳とを示す。

只見鄰舍邊一個小的，叫鐵頭，道「小乙官人，今日承天寺裏做佛會，你去看一看。」許宣轉身到裏面，對白娘子說了。白娘子道「甚麼好看。休去。」許宣道「去走一遭，散悶則個。」娘子道「你要去，身上衣服舊了不好看，我打扮你去。」叫青青取新鮮時樣衣服來。許宣著得不長不短，一似像體裁的。戴一頂黑漆頭巾，腦後一雙白玉環。穿一領青羅道袍，腳著一雙皂靴。手中拿一把細巧百摺描金美人珊瑚墜上樣春羅扇。

見ると隣に住む召使いの鉄頭がやってきて許宣に言った。「許宣さん、今日は承天寺に灌仏会を見に行きませんか。」許宣がそのことを家の中にいる白娘子にも伝えた。すると白娘子は「見るものなどありませんよ。行くことはありません。」と応じた。許宣は「ちょっと

行ってみようよ。気晴らしになるよ。」と言う。白娘子は「行くにしても、そんな古いものを着ていったらみっともありません。支度をしておあげましょう。」と言って、青々に新しい流行の服を持ってこさせた。着てみると体にピッタリ合って、まるであつらえたようであった。その身なりはといえば、一對の白玉の環の飾りのついた漆黒の頭巾をかぶり、身には流行の黒い薄絹の道服をまとい、黒の長靴を履いている。手にするは金泥で美人を描いたごく上等の、薄絹の京扇子⁵⁾で、珊瑚の飾り玉がついている。

ここで細々と衣服や装飾品について説明が為されているのは、それが物語の展開の伏線になっているからである。白娘子が許宣に与えた衣服と扇子は全て盗品であり、すでにその特徴が手配済みのものであった。このため、許宣が寺の境内を歩いていると、役人に発見され捉えられてしまうのである。特に役人は、許宣の手にする扇子と扇子についている珊瑚の飾り玉が手配書きにピッタリと一致するというので、許宣を捉えるのである。物語のプロットから言えば、許宣の持ち物が役人の探している盗品に一致していることが分かればそれでよいはずなのだが、ここではその盗品となった品物について、事細かに説明が為されており、紛れもない高級品であることが強調され、だからこそ役人たちも一目でそれを見破ることができたのだ。

こうした品物そのものについてのこだわりは、『白蛇傳』の始めの方にもすでに現れていた。それは二人がわりない仲になるきっかけとなる傘である。雨に降られた許宣が、奉公先の薬屋の主李将仕の兄弟のやっている薬屋で傘を借りるのだが、その際に「この傘は清湖八字橋の舒さんの造った傘で、骨が八十四本もあって、柄は紫竹でできている上等品⁶⁾。おまけにどこも壊れたり破れたりしてはいない。くれぐれも大事にな。」と言わ

れ、ようやく借りてくるが、再び白娘子に出会ったがために、その傘を貸さざるを得なくなる。そこで、白娘子への思いは思いとして、とにかく傘を取ってきて返さなくてはと、箭橋近くにあるという白娘子の屋敷へ出かけていくことになる。高級品の傘を又貸ししたことが、一目惚れした白娘子の家を訪ねる口実とする、傘が高級品であることの説明によって読者にそれが不自然でないことを理解させるのである。

中村光夫氏の指摘にあった⁷⁾ことだが、リアリズムのもとをたどっていくと、ラテン語の Res (その変化形 Realis) に行き当たる、そしてその意味はモノ、とかコトにあたる。従って、一つの解釈としては、リアリズムは「モノ主義」とでも言うべき考え方であり、少し理屈っぽく言えば、モノとモノとの関係を通じて人間や社会を描くという考え方であるということになる。その視点から『白蛇傳』を見ると、雨がつきもののような清明節に杭州のブランド品と思われる傘が兩人の再度の出会いのきっかけとして使われ、蘇州、杭州では初夏にあたる旧暦四月八日の灌仏会には珊瑚玉のついた高級品の扇子が許宣逮捕の手がかりとなる、まさに「モノ」が物語のプロットに重要な役割を果たしている。しかもそのものは何でもよいというモノではなく、代替の難しいブランド品、高級品として詳しい説明がなされ、小道具として使うことに不自然さを感じさせないような工夫がされている。つまり、物語の語り手は、モノの実用的役割（この場合で言えば、季節との関わりで実用性がある）のみならず、その代替困難な記号としての性質をも駆使して物語を語っているのである。

2-2 地名と神々の利用

許宣が蘇州へ配流された後も、地名は重要な意味を有する。まずは蘇州に着いてからの落ち着き先は、「吉利橋」のたもとにある旅館であった。この吉利橋は蘇州城内の中心にある玄妙觀から西南へ歩いて 20 分ほどの

ところにある。橋は城内を東西に横切る運河に架けられたもので、当時の城内の交通の要所であったと思われる。

次に重要な地名は、灌仏会が行われている承天寺であるが、この名前は南宋という時代設定と合っていない。寺院の最も早い時代の名称は「重玄寺」であったが、北宋期に承天寺となった。しかし、徽宗の時代に、寺院の名称に「天」の字を使うことが禁止されたために「能仁寺」と改められた。その後元代には承天寺、或いは承天能仁寺と呼ばれたが、火災のため全焼し再建された後は旧名の重玄寺に戻った。清代になって、「玄」の字が康熙帝の諱と重なるため「玄」を「元」に改めたのである。但し、承天寺という名前を有する巷が現在まで残っているため、重元寺の中の塔頭の一つとして承天寺は存在していたと思われる。そのため、ここでも承天寺という寺院名が使われたと思われるが、徽宗以降の南宋の寺院名として使われるはずはないということだけは確認しておくと同時に、この寺院が蘇州の中でも最も大きな寺院であること、さらには元末に張士誠が蘇州を占拠し承天寺を臨時の宮殿としたことを踏まえて、許宣再逮捕という新たなプロットが展開する場所として選ばれたのであらうと思う。

さらに舞台は鎮江へ移る。まずここで出てくる地名が「針子橋」である。この地名については金璐明「白蛇伝在鎮江的立体性传承保护⁸⁾」が陳其元「針子橋小考」(『鎮江日報』2003.3.28)を引用し、以下のように述べている。

元代の『至順鎮江志』の記載によれば、針子橋の下は市内の運河であり、鎮江の港を経て長江に達する。橋の東側には豊美樓、西側には賞心樓があり、橋の近くには針子橋巷があった。ここから、宋元の時期の鎮江針子橋とその付近の通りは極めて賑やかであったということが分かる。(p.64)

この後、許宣は五条巷の豆腐屋の二階に住むことになるが、「五条巷」はすでに多くの人が指摘するように五条街の誤りであると思われる。この五条街についても金瑠明「白蛇傳在鎮江の立体性傳承保護」は以下のよう
に述べる。

「五条街」は当時鎮江の中でも大変に賑やかな商店街であった。馮夢龍自身が編纂した『醒世恒言』所収『張舜美燈宵得麗女』の中で「私には鎮江の五条街で商人相手の旅館を営んでいる遠い親戚がいますので、充てにできますよ。」とあるのが、五条街の賑やかさを示す証左である。(p. 64)

このように鎮江の地名を利用していることについて、金瑠明は馮夢龍が鎮江で三年間訓導の職にあたっていたことを理由として挙げている。その指摘は重要ではあるが、五条街が『警世通言』にも『醒世恒言』にも地名として用いられていることは、何よりその地名が読者に知られていたからではなかったか。もしこの通りが地元には知られていない名前であれば、引用することにほとんど意味はないからである。大運河と長江の交差する鎮江は、商人や官僚にとってはしばしば訪問する可能性のあるまさに交通の要衝であった。その鎮江の、商店や旅館の密集する五条街もまた多くの人々にとって訪れたことがあるか、さもなくとも耳にすることの多い地名であったはずである。鎮江で展開する物語は、この五条街とやはり人々によく知られた金山寺で展開するのは、決して偶然ではない。

旧稿で指摘したように、『白蛇傳』では杭州の地名が数多く引用され、しかもその地理的な位置関係については極めて正確に述べられている。また、許宣が身投げの場所として「長橋」を選択したことなどに見られるように、地名の内包するイメージ、或いは地名の物語の index 機能を効果的に活用していることも旧稿、及び前稿で明らかにしたが、蘇州の地名、鎮

江の地名を見ると、引用数は多くはないが、効果的な役割を果たすように選択されている。

次に、物語は鎮江でのクライマックス、金山寺での白娘子と法海との対決の場面になる。七月七日の英烈龍王の誕生日の祀りに金山寺へ遊びに行くのだが、ここで注目すべきいくつかの記述がある。まず第一に七月七日を「英烈龍王」の祀りとしているが、この根拠は不明である。「英烈龍王」という名称と、七月七日を龍王の祭りとする資料は管見の限り見当たらない。龍は水を司る神であるため、季節の変わり目に祀られることが多く、太陰暦の二月二日（龍擡頭と呼ばれる）から始まって、三月三日から四月中旬あたり、また梅雨の季節と重なる時期の六月初旬から中旬に行われる。近年の杭州の端午節では、龍舟競争の際に龍王を祀る儀式が行われており⁹⁾、龍王を祀るということが「風調雨順」の祈りと結びついていることが分かる。要するに、龍王節とは一年の始まり或いは農耕の重要な季節に、龍を祀って特に雨が適度に降ることを祈る祀りである。

言うまでもなく、七月七日は七夕（乞巧節ともいう。）であり、太陽暦の八月の上旬、雨とは関係が乏しく、従って龍とも関係があるとは思えない。特に長江流域であれば、真夏の季節であって、雨が期待できる季節ではあり得ない。また、日本でも中国でも中元＝盂蘭盆会の季節に重なるため、七夕には中元の始まりという要素が伴っているが、やはり雨とも龍とも関係がない。にもかかわらず、こうした設定を成り立たせているのは、白蛇が水神であり、しかも龍と蛇が近似の形象であること、七夕が牛を媒介とする男女の結びつきに始まり、神に別れを強制されて終わる物語に基づく祭祀であって、七夕の物語と『白蛇傳』のプロットが極めてよく似ていることがこうした設定をもたらしきっかけとなったと考えられる。

もう一点重要なのは、物語全体が季節の移り変わり「春⇒夏⇒秋」とパラレルに語られているということである。春たけなわの清明節で出会い、

初夏の蘇州の灌仏会で新たなトラブルに出会った許宣と白娘子すなわち水神の女神は、七夕＝立秋を迎えるに至り、もはやこれ以上の水をもたらす必要はなく、物語はエンディングに向かう、そのことを示すために七夕を選んだのではないかと推測するのである。

次に、金山寺へ出かけるにあたり、白娘子は当然ながら出かけること自体には反対しつつも、坊主と口をきかないようにと言いながら、新しい衣服と靴に靴下に着替えさせ、更に衣服の袖に香合を入れさせるなど細かく気遣いをしていることが記述されている。この点は後で述べることと関わるのだが、白娘子の形象がより妖怪離れし、人間に近づきつつあることが注目される。

許宣は鎮江から舟に乗って金山寺へ到着する。明末には、長江は今よりも川幅が広く、金山寺は北固山、焦山とともに長江の中の島であったが、今これらの島のうち焦山以外の二つの「島」は長江から離れた陸上の小さな丘となってしまっている。

この後の法海の形象、法海と白娘子の対立については、『義妖伝』以降の小説や戯曲とは全く異なるものであることを一応確認しておきたい。白娘子は水神ではあるものの、放置しておけば洪水を起こす危険な存在であるため、これを鎮める法海は無論悪役などではなく、許宣だけではなく杭州の市民を守る役割の高僧であって、「眉目秀麗のまことの高僧」として描かれる。そして法海との戦いは、次のようにあっさりと描かれる。

法海は許宣を探して本堂から出てきたが見つからない。寺の外へ出てみると、大勢の人々が川辺で波が静まったら舟に乗ろうと待っている。ところが、波は一層激しくなり、「行けないね。」と言っている。長江を見ると、川中に一艘の舟が飛ぶようにやってくる。許宣は太鼓持ちの蔣和に言った。「こんなにも波が高くて川を渡ることができないのに、あの舟はなぜあんなにも速いんだ。」そう言っていると、舟

はそこまで来ている。見ると、一人は白い服を身につけた夫人、もう一人は藍色の服を着た女であった。岸辺に着いたところをよく見ると白娘子と青々であった。許宣の驚きはひとかたならないものだった。白娘子は岸辺に着くと叫んだ。「あなた帰りましょう。早く舟に乗って下さい。」許宣が舟に乗ろうとすると、誰かが許宣の後ろで怒鳴った。「この畜生め！ここで何をしておる！」許宣が振り返ると、誰かが「法海禪師が来られた。」と言った。禪師は言った。「畜生め。またもやってきて人々を殺そうとしてもそうはいかんぞ。私はお前を鎮めるためやってきたのだ。」白娘子は和尚を見ると舟を漕いで岸を離れ、青々とともに川中で舟をひっくり返し、二人とも水底に沈んでいった¹⁰⁾。

ここには、よく知られた「水漫金山」の場面も、白娘子と法海とが法力を闘わす場面もない。水に沈んだ白娘子と青々の行方には物語は触れず、やがて恩赦によって許宣は杭州へ戻るがそこでエンディングの前の些か滑稽な一幕が待っている。

杭州へ戻った後、白娘子が先回りをしていたことを知った許宣は恐怖と諦めに打ちひしがれる。事情を知った許宣の義兄李募事は、許宣のために、白馬廟前に住む戴氏に大蛇を捕らえるよう依頼する。これは失敗に終わり、その過程が滑稽な一幕として描かれるが、ここで問題にするのは白馬廟という廟である¹¹⁾。

この廟は本来は崔府君の廟であった。崔府君とは名は珏（珪）、字は子玉（元靖）、唐の楽平（今山西省昔陽）の人とされるが、むしろ物語の中での形象に実在の人物に近い設定が与えられたと考えた方がよい。古い例としては敦煌変文の『唐太宗入冥記』における県丞崔子玉として登場する。元雜劇『崔府君斷冤家債主』では崔子玉の名で冥界の裁判官を務める。さ

らに明代の『西遊記』第十一回では崔珏の名で太宗を地獄からあの世に戻す役割をする。現在でも、黄河流域の各都市に廟があり、信仰を集めている。崔府君廟が白馬廟と名を変えたのは、高宗が金軍に追われ危機に直面した時、崔府君廟にあった馬の塑像が高宗を乗せて渡河したという伝説に基づく。『三教源流搜神大全』によれば崔珏が高宗を守護し、馬の塑像を使って高宗を落ち延びさせたのであり、この功を以て崔府君は靈聖護国真君に報じられた。蛇採り名人とおぼしき戴先生はその力を白馬廟、すなわち冥土の判官とも呼ばれる崔府君に依拠したのではないかと推察されるが、残念ながらその力は白娘子には全く通用しなかったことになる。神々にも地域性がある中国のこと、黄河流域出身の崔府君では、たとえ冥界の名判官とはいえ、杭州・西湖の水神である白娘子の敵ではなかったのである。

いよいよエンディング、許宣は義兄の勧めに従い、赤山阜の知り合いの家に身を寄せようとする。『白蛇傳』冒頭の入話の部分で靈隠寺とその界限が紹介されるが、物語とは無関係であり、物語に直接関わる地名としては最も西に位置する。この場所が西湖周辺から錢塘江へ行く場合の主要なルート上にあり、同じ『警世通言』の第十四巻『一窟鬼癡道人徐怪』と『白蛇傳』では、杭州、西湖の地名の引用が完全に東西に分かれているのだが、その東西の分かれ目を示すランドマークの役割を果たす。許宣がわざわざ赤山阜まで行きながら甲斐なく引き返し、浄慈寺を経て長橋まで戻ってきて法海に出会って救われるというプロットは雷峰という最後の場所を強調するためにあるように思われる。

白娘子の告白の中に、青々が蘇堤第三橋望山橋の下で精となった青魚であるということは、この橋が三潭印月の三基の石灯籠と向かい合っているということにもいくらかの意味がありそうである。なぜなら、三潭印月の石灯籠の下には青魚或いは黒魚の精が鎮められているからである。

2-3 白娘子の心理描写とまとめ

『白蛇傳』は西湖に依拠して暮らしてきた杭州の人々の水神信仰が基礎にある物語であるというのが筆者の考え方であり、水神である白娘子に対して親近感を有する描写が頻出する。そして、その形象は時に神や妖怪であるよりも生身の人間に近づくことがある。すでに引用した、寺院に遊びに出かける許宣に対し、それが白娘子自身に危機を将来する行為であると知りつつ、その都度オシャレな格好をさせて出してやるという描写は、まさに男を愛する女性の姿である。

さらに、鎮江で、許宣の世話をしていた李員外が白娘子の美貌に魅せられて、これを手込めにせんとしたが、いち早く察した白娘子は自らの蛇身を現してこれを撃退した。しかし、そのことを悔いた白娘子の行動を語り手は次のように物語っている。

白娘子は家に戻り考えました。「明日李員外は店の中で、今日私が見せた本性のことを許宣に言うに違いない。」そこで、一計を案じ、服を脱ぎながら、ため息をついて見せました¹²⁾。

また、いよいよその正体が完全に明らかになったとき、青々をして次のように言わせている。

旦那様、奥様はあなた様が生粋の杭州人でとても素敵なところがお気に入りなのです。それにあなたの愛情がとても深いことを喜んでおられます。私の言うことをお信じ下さい。奥様と仲良く暮らし下さい。疑いはご無用ですよ。

ここに見えるのは、「私に逆らえば町中を洪水が襲い、多くの人々は命を喪う」とおどす白娘子ではなく、まさに許宣への思いに身を焦がす一人の女性に過ぎない。千年の修練を経た蛇神＝水神の物語は、杭州と西湖、

さらには蘇州と鎮江の地名をインデックスにして様々な史実や、野史の記録、様々なジャンルの物語を取り込むことで、水神の物語を大きく変貌させた。言い換えれば、西湖の水のめぐみをもたらす水神と杭州の結びつきの強さが、杭州の地名を物語の中に取りこむ力となり、蛇と水神を信仰する杭州人の自然観と宗教観が水神に美しく、愛らしい形象を与えたのである。同時に男女の結びつきが豊かな水を豊かな実りをもたらすという、日本と共通の稲作文化があることも忘れるべきではない。以上を一つの結論として本論の結びとする。

付記：本論考の「1『白蛇傳』と同時代へのメッセージ」の部分は、以下のような過程を経て書き上げた。旧稿「『白蛇傳』の解説補遺 (1)」を書き上げた後、その政治的なメッセージが馮夢龍個人とどのように関わるか、すぐには明確な答えが見いだせなかった。しかし、王子成氏の博士論文指導の過程で、王氏と議論を進めながら、馮夢龍と「三言」がどのような政治的メッセージを発しているのかについて、王氏と筆者はそれぞれが次第に明確な回答を得るに至った。この点については、討論という方法を通じてと言う限定つきではあるが、共同研究の成果であるということができる。この点を付記し、王子成氏に感謝する。

注

- 1) 中国の明代の短編小説は、説書人（講釈師、噺家に相当する）という芸人によって語られたものというスタイルを採る。
- 2) この部分、あたかも南宋時代に語られていたかのような形式を採る。しかし、この物語は南宋滅亡の話であり、引用されている詩は明人の詩なので、辻褄が合わない。
- 3) 遼、金、モンゴルを指すが、主として金を指すことが多い。
- 4) 這一首詩，是張志遠所作。只為宋朝南渡以後，紹興淳熙年間，息兵罷戰，君相自謂太平，縱情佚樂，士大夫賞玩湖山，無復恢復中原之志，所以末一聯詩說到「莫向中原誇絕景，西湖遺恨詩

西施」。那時，西湖有三秋桂子，十里荷香。青山四圍，中涵綠水，金碧樓臺相間，說不盡許多景致。蘇東坡學士有詩云「若把西湖比西子，淡妝濃抹兩相宜」。因此，君臣耽山水之樂，忘社稷之憂，恰如吳宮被西施迷惑一般。(略)

今日宋朝南渡之後，雖然夷勢猖獗，中原人心不忘趙氏，尚可乘機恢復。也只為聽用了幾個奸臣盤荒懈惰，以致於亡。(『古今小説』卷二十二、『木棉庵鄭虎臣報冤』、テキストはゆまに書房刊の影印本『古今小説』第二卷、1985.3 による。)

- 5) 原文の扇子は「百摺」とあって骨の多いものを指す。そのため、ここでは京扇子とした。
- 6) 傘は現在でも杭州の特産品とされる。
- 7) 中村光夫『小説入門』（新潮文庫、1971）pp.35～39
- 8) 《艺术百家》2011 第 8 期、「新浪博客」サイトよりダウンロード。
- 9) 2017-05-27『杭州日报』の記事による。
- 10) (和尚) 自出方丈來，前後尋不見。復身出寺來看，只見眾人都在那裡等風浪靜了落船。那風浪越大了，道「去不得。」正看之間，只見江心裡一隻船飛也似來得快。許宣對蔣和道「這般大風浪過不過渡，那隻船如何到來得快？」正說之間，船已將近。看時，一個穿白的婦人，一個穿青得女子，來到岸邊仔細一認，正式白娘子和青青兩個。許宣這一驚非小。白娘子來到岸邊，叫道「你如何不歸？快來上船！」許宣卻欲上船，只聽得有人在背後喝到「業畜在此做甚麼？」許宣回頭看時，人說到「法海禪師來了。」禪師道「業畜，敢再來無禮，殘害生靈，老僧為你特來。」白娘子見了和尚，搖開船，和青青把船一翻，兩個都翻下水底去了。
- 11) 白马庙巷，南起严官巷，北折东与中山南路相连，是与太庙巷相邻的紫阳山麓的一条小巷，长约两百六十米，宽约三米。南宋时，名寿域坊，因粮料院在此巷内而名粮料院巷。白马庙，祭祀白马。相传靖康年间（1126～1127 年），赵构为康王时被金兵追赶至江边，有白马帮他过江后，白马饮水化为泥马，逃脱了被俘的厄运。故民间流传着“泥马渡康王”的故事。后在杭州建白马庙，又名白马庙巷。其实，白马巷旧名护国天王庙，祭祀磁州崔府君珏。庙祀在磁州，宋朝南渡后迁至杭州。相传崔府君是唐代香洲滏阳县金，北宋时封为护国里应昭惠王，南宋淳熙十三年（1186 年）封为真君，垂旒秉圭，称白马明王。（「宋高宗与白马庙、章家桥」林正秋、2013.11『杭州党刊网』2017.12.10）
- 12) 白娘子回到家中思想。恐怕明日李員外再鋪中對許宣說出本相來。便生一條計，一頭脫衣服，一頭嘆氣。

付記 本稿の分析の対象とした『白娘子永鎮雷峰塔』のテキストについては、ゆまに書房刊の影印本『警世通言』第三卷、1985.8 により、魏同賢校点『警世通言』（江蘇古籍出版社、1991.9）を参照した。